ちいさな証

朝のデボーションの企画を担当して

原憲二
スイス日本語福音キリスト教会

主催者の一員として、スイス教会の兄弟姉妹と、さらにはヨーロッパを中心とした各国の教会、集会の兄弟姉妹と共に主のために心合わせて奉仕できましたことは最高の喜びでした。

私は本大会のいろいろな企画、しおり作成を担当する中で、特に「朝のデボーション」の企画についての思い入れを、振り返って皆様にお分かちしたいと思います。

本大会では中川先生をはじめ、講演してくださった各先生方を通して、神様は計り知れない壮大なご計画をもって、私たち人類を恵みの中にいれてくださっていることを学びました。それは私にとっても、どこから来て、どこへ行くのか、今どこに立っているのかを確認することができただけでなく、これまでの私の狭い福音解釈のスケールを、将来にわたって大きく広げてくれるものでした。

特に、「御国を待ち望む」とは、私たちを愛してくださっているイエス様に会うことこそ最高の喜びであり、目的であるということ。また、イエス様の最初の到来と復活とともに、御国は部分的に私たちの只中に始まっているということ。そして、私たちはこの世において「御国を来たらせたまえ」と祈りながら、イエス様と共に御国建設の働き人に加えられているということが心に残りました。

私たちが現在立っている、御国を待ち望む歩みは、イエス様が共にいてくださいますから力強い反面、戦いが伴います。マイヤー先生は、はっきり迫害とわかる攻撃よりも、平和そうに見える私たちの日常にある、「まどわし」のほうが危険といわれました。確かにそうだと思います。私たちは膨大な情報の嵐のなかに毎日さらされています。朝起床と同時にスマートフォンは私を神様から目をそらそうとします。神様から引き離そうとするサタンに立ち向かって、私たちはどうしたら良いのか。この点について先生方が強調されていたことは「みことば」を通してしっかり（感情によらず）神様に繋がるということでした。

私たち主催者として、この神様に繋がるための実践として企画したのが朝のデボーションでした。危機と言われるこの時代にあってますます信徒一人ひとりが個人的に神様と密接に繋がる必要性を感じたからです。担当者としては、「朝のデボーション」は自由参加としたものの、講演プログラムと並行して両輪をなす重要なプログラムとして位置付けました。

折にかなってデボーション冊子「みことばの光」を編集されている矢吹博先生を私たちの教会に招いて、事前にデボーションセミナーをしていただき、準備することもできました。聖書同盟が勧めるデボーションの手順（「みことばの光」の巻末に記されています。しおりにもあえて紙面をさきました）は、信仰の先達が編み出したすばらしいものだと体験を通して感心しています。私たちは時に、みことばを読んでいるつもりでも、自分勝手な考えへと脱線しがちです。この手順に素直に従って文脈を解釈するとき、隠されていた宝が輝きはじめるように神様のメッセージが個人に迫ってくるのです。そこには神様と個人的に対話する喜び、聖霊の慰めと湧き上がる力を実感できます。

朝一番に何をするか、考えてみればこの朝一番の行動が、その日の行動や心構えを左右します。情報の渦の中に飛び込む前によほどの備えがないかぎり、私たちは簡単にその渦に飲み込まれてしまいます。惑わされずに、時代のしるしを見きわめる力は、個人と神様との絆の太さによるのではないでしょうか。この集いを機会に、これからデボーションをはじめられる方が増えて、ますますその恵みにあずかる兄弟姉妹が起こされるように願っています。